



# 駿府と今川氏

第11回

## 今川氏輝の死と花蔵の乱

### 謎めいた氏輝の突然の死

氏輝が、母寿桂尼に代わって文書を出し始め、国主としての立場で領国経営に乗り出したのは天文元年（一五三二）からである。馬廻衆を編成したり、商業振興策を打ち出したり、それまでの氏親・寿桂尼のときには見られなかった新しい施策を始めている。

ところが、その矢先の天文五年（一五三六）三月十七日、氏輝は駿府今川館で突然死んでしまったのである。死因については不明で、病弱だったという点を重視し、単純に病死とする見方もある。

確かに、今川氏と同盟関係にあった相模の北条氏関係の史料、例えば、鎌倉の鶴岡八幡宮相承院の僧である快元の日記『快元僧都記』には「今川殿の不例の折袴として、大般若を読まる」とあり、不例、すなわち病気に罹っていたことは事実と思われる。

ただ、不可解なのは、同じ日に今川館ですぐ下の彦五郎という名前の弟も死んでいるのである。こうなると、単純な病死ではなく何かの事件性のある死ということも考えなければならない。中には、

「浅羽本系図」所収の今川系図のように入水自殺とする史料もある。氏輝の死の謎はまだ解けていない。



▲臨濟寺境内に祀られる今川氏輝墓（左より2つ目）

### 玄広恵探と梅岳承芳の家督争い

氏親には嫡男氏輝を筆頭に六人の男子がいた。長男氏輝、二男彦五郎の死で、家督は弟たちの誰かが継ぐことになる。

その際、末子の氏豊はすでに尾張の今川家に養子に行っており、また、四男の象耳泉契は仏門に入っており、家督候補としての名乗りを上げなかった。結局、やはり仏門に入っていた三男の玄広恵探か五男の梅岳承芳かに絞られることになったのである。その頃、家督の継承順位に年長順

という考え方はなかった。むしろ、母が正室だったか側室だったかのほうが大きな意味を持っており、この場合、兄ではあるが三男玄広恵探の母は氏親の側室福島氏で、五男の梅岳承芳の母が氏親正室の寿桂尼だったことで、家中の大方の意向は梅岳承芳の方に家督を継がせる方向に傾いていたのである。

しかし当時、周りからも「花蔵殿」と呼ばれていた玄広恵探は、母福島氏が氏親の重臣福島氏の出だったこともあり、そのまま引き下がることを潔しとせず、梅岳承芳と家督を争うことを決意し、ここに、今川家中を二分するような内訌（花蔵の乱）となった。

結局、家臣の大半を味方につけることに成功した梅岳承芳側が勝っている。これが、還俗して今川家九代目となる義元である。



▲花蔵の乱の舞台となった花倉城

撮影：水野 茂（2点とも）